

児童館での手作り楽器制作と演奏活動の企画と実践における保育者養成課程学生の学び（2） —楽器の特徴や活動対象年齢の分析をもとに—

A Study on the Early Childcare Students' Learning by Planning and Practicing the Activity of Making Musical Instruments and Playing Them in a Children's Recreation Center (2)
—Focusing on Students' Analysis of the Characteristics of Instruments and the Target Age of Children for Each Activity—

山 本 敦 子
Atsuko Yamamoto

（要 約）

本稿では、平成 27 年度実施の保育者養成課程学生対象の授業実践「児童館における親子を対象とした手作り楽器制作と演奏活動の考案と実践」の取り組みについて、学生の学びや授業の成果を把握するための質問紙調査から「楽器の特徴や活動の対象年齢の分析」について考察を行った。結果、実践前後での学生の分析内容は実際の子どもの姿や発達段階への洞察を踏まえて変化を遂げていることがわかり、分析体験自体に保育実践に必要な「見とり力」「援助考案力」「省察力」の形成につながる意義があったと考察した。さらに本授業実践の今後の課題を、近年の乳幼児音楽表現研究より「アフォーダンス」「文化的実践としての楽器」という視点から検討した。

（キーワード）

児童館での企画実践、学生の学び、手作り楽器の特徴、活動の対象年齢

1. 課題の所在と本研究の目的

（1）課題の所在

本研究は、平成 27 年度に実施した保育者養成課程の学生を対象とした授業実践「児童館における親子を対象とした手作り楽器制作と演奏活動の考案と実践」の取り組みについて、学生の学びや授業の成果を把握するための質問紙調査より結果分析を行い、保育者養成課程における本授業実践の意義と課題について考察を行うものである。

前研究（山本 2016）では、保育者養成校での手作り楽器に関する授業実践の先行研究に焦点を当て、学生の学びと授業実践の意義について考察を行った。結果、先行研究の授業実践においては、①音楽体験に関する学び②創作体験に関する学び③自己や他者への気づき④保育・教育実践としての学びをもたらすものとして、手作り楽器による授業実践は一定の成果を得ていることがわかった。

これを受けた筆者は平成 27 年度に、保育者養成課程の学生を対象とした演習授業「ゼミナールⅡ」において、学生たちに手作り楽器の制作と保育の観点からの分析に取り組ませ、学内での学習体験を、地域の児童館で親子を対象とした楽器制作と合奏活動を企画、実践させる活動へと発展させた。この一連の取り組みに関して、実践後、学生の学びや授業の成果を把握するために記述または質問紙調査を通して学生に振り返らせた。この回答記述結果より前稿（2017）では「自身の取り組みの振り返り」に焦点を当て、参加者への興味付け、制作援助、演奏活動進行の各過程における学生の自己評価と対応方法

や意図について分析を行った。結果、①自己評価においては、興味付け、制作援助は概ね効果的に行えたが、演奏活動進行では効果的に行えた学生と行えなかった学生に分かれた。②学生と子ども、子どもたち同士が初対面であるという状況のもと、学生は各過程において基本的に「活動の楽しさを感じさせる」「安心して活動に参加させる」ことを意図した対応を図っていた。③制作援助過程では、「(作り方の)理解を促す」「発達に応じた作業をさせる」「意欲・自信・達成感を持たせる」との意図による対応が特に見られ、子どもの心情や育ちを読み取り、知的・技能的側面に配慮しながら、共感的な態度で個に応じた援助が行えるように努めていた。このことは保育を実践する際に必要な行動的側面の力量としても相通ずる部分があり、本授業実践の意義の一つとして見通しを得ることができた。

(2) 本研究の目的と方法

継続研究となる本稿では、質問紙調査の回答記述結果のうち「保育・教育実践における楽器の特徴や活動の対象年齢の分析」について取り上げ、保育者養成課程における本授業実践の意義と課題について引き続き考察を行うこととする。前稿（2016）でも述べたように、手作り楽器に関する本授業実践の取り組みは、保育者養成課程2年次のゼミナールにおいて前期に5回、後期に9回行い、各回での学びが後期第12回目の児童館での実践につながるように計画した。今回のイベントで制作した風船太鼓、ウォータースティック、プラカップ太鼓の3種の楽器は、前期第10～12回の授業で学生たちが共通課題として制作したもので、制作後に保育・教育実践の観点から楽器の特徴や対象年齢について受講生全員に分析を行わせた。またイベント実践後にも担当楽器ごとに同じ内容で分析を行わせたことから、実践前後における学生の分析結果にどのような変容が見られるのか考察を行う。なお、調査実施と結果考察に際しては、関係者に研究趣旨の説明と研究への協力依頼、個人情報保護の倫理的配慮を行った。

2. 保育・教育実践における風船太鼓の特徴と活動の対象年齢の分析結果の考察

(1) 特徴について

図1は保育・教育実践における風船太鼓の特徴についての実践前と実践後の「とても満たしている」から「全く満たしていない」までの5件法による分析結果であり、表1は実践前と実践後の評価要因を示している。実践前後で肯定的な評価をそのまま維持しているのは、「1.素材を活かせているか」「4.外見（視覚）」「7.鳴らしやすさ」「8.音の質」の4項目であった。表1の評価要因に示すように、「4.外見（視覚）」については実践場面でも子どもたちが「一番興味を持ってくれていた」「自分の好きな絵を描いてオリジナル感が出せていた」とこと、「7.鳴らしやすさ」についても、制作後に子どもたちが風船をつまんだり、振ったり、転がしたり、床に打ち付けたりしながら音を自由に試す姿が見られたことから、その意義を改めて見出していることがわかる。なかでも、完成した太鼓を脇に抱えて音を鳴らしながら歩く子どもの姿は多く見られた。風船をつまむと大きな音とともにその振動が指を介して伝わってくることから手触りとしても心地良かったのだろう、「5.手触り（触覚）」については実践後に評価ランクを肯定方向に上げている。肯定評価の範囲内ではあるが実践後にその評価ランクを下げているのは「3.作りやすさ（構造面）」「6.持ちやすさ」「12.遊び道具としての発展性」の3項目である。ただし「12.遊び道具としての発展性」については、実践前は評価要因の記述内容にあまり具体性がなく、項目自体の意

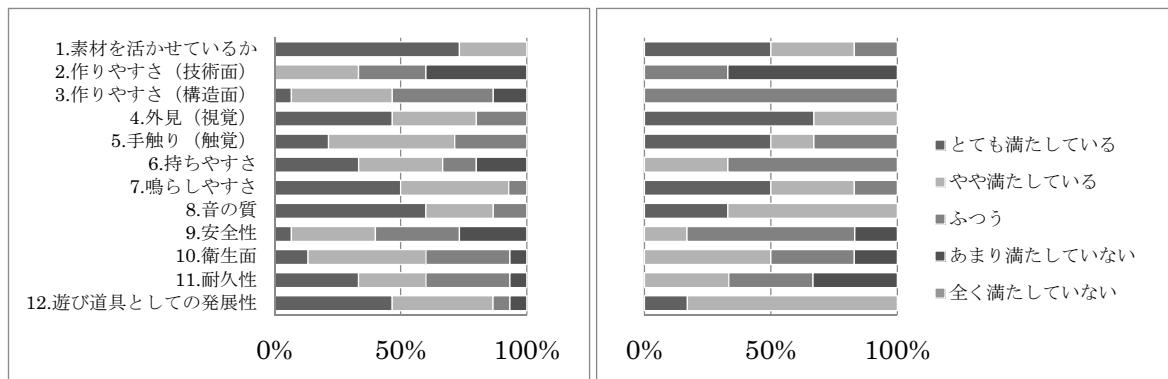


図1 風船太鼓の特徴分析（左図は実践前 n=15 右図は実践後 n=4）

表1 風船太鼓の実践前○と実践後●の評価要因

（紙面の都合上実践後の記述内容は実践前に見られなかったもののみ掲載）

体験	評価項目	肯定評価要因	否定評価要因
作る	1.素材を活かせているか	○空き缶の容器をリサイクル ○缶の硬さ、形を活かしている ○風船の伸縮性 ●風船は膨らませるだけないと親子が気づいた	
	2.作りやすさ(技術面)	○風船を張るとき皆で協力できる	○風船を缶にかぶせるのが難しい ○鼓面を張る際二人で行わなければならぬので援助が必要 ●大人でも風船を張るのが難しい
	3.作りやすさ(構造面)	○手順がわかれればすぐできる ●なぜ音が鳴るのかわかりやすい	○丸型なので作るのが難しい
触れる・鳴らす	4.外見(視覚)	○自分で自由にアレンジでき自分の楽器が作れる ●一番興味を持ってくれていた ●自分の好きな絵を描いてオリジナル感が出た ●転がしたくなる形をしている	
	5.手触り(触覚)	○風船の面を下にすると小豆が手に当たり、不思議な感覚・風船の貼り具合がいい ○ゴムのブニブニ、サラサラした感触を楽しむ	○缶自体はあまりよくない
	6.持ちやすさ	○軽くて持ち運びは便利	○大きいので両手で持たなければならぬ ●小さな子どもには抱えて持ちにくい
	7.鳴らしやすさ	○マラカスとして振るのも簡単 ●少し傾けるだけで音が鳴るので小さい子でも簡単に鳴らせる。転がすのは4歳ごろから ●床にコンコンと打ち付けている子どももいた	○風船の引っ張り具合が難しいかもしれない
	8.音の質	○3種類の音が出来る ○面の貼り具合によって音の高低が変わる ○置くより持ったほうが音が響く ○二つの音が鳴るので合奏に活かせる ○一人ひとり違って面白い ○中に入れる小豆や米の量によって音が変わる	○音の高低はあまりない ○風船が緩むと音が変わる ○風船をうまく張れていないと濁った音がする
	9.安全性	○風船が割れたら缶の切り口がむき出しになるがテープで固定してあるのである程度は安全	○硬いので落としたり投げたりすると危険 ●缶を持つと両手がふさがれるため歩くと危険
	10.衛生面	○缶をきれいに洗っておいたら大丈夫	○缶のさびに気を付ける ●乳児が舐めないように注意する ●食物を入れているので虫が湧く可能性がある
使う	11.耐久性	○面をしっかり貼り、とがったものを当てないようとする	○風船は意外に劣化しやすい気がする ●風船が割れると太鼓にならなくなる
	12.遊び道具としての発展性	○転がす ●転がしたり振ったりするなどつまむだけの鳴らし方にこだわらずに取り組める ●高く積むことができる ●まくらにする	

味理解も弱い様子であるが、実践後は「転がしたり、高く積んだりして遊べる」など評価要因も具体的に記述され、遊び道具としての発展性を見出しているという特徴が見られている。一方、否定評価の範囲に及んで実践後にその評価ランクを下げているのは「3.作りやすさ（技術面）」「9.安全性」「10.衛生面」「11.耐久性」の4項目である。「3.作りやすさ（技術面）」は、風船を張る作業に対して実践前から否定評価が見られたものの、実践に際しても、子どもの手指の発達上子ども一人で作業を進めるのはやはり難しく、学生の援助が必要となったこと、「9.安全性」は、実践前から認識されていた缶の切り口の危険性について、手を怪我しないようにすべての缶の切り口をガムテープで止めて万全の状態で臨んだものの、子どもたちと作業に当たる中で、そのことの重要性を改めて認識したことがうかがえる。また「缶を持つと両手がふさがれるため危険」「缶が大きいので足の上に落としたら危険」という点も安全性を問う視点として挙げられている。「10.衛生面」は、缶に入れる米や豆を炒る等して防虫のための事前処理が必要なこと、「11.耐久性」では風船が割れた場合に楽器としての機能を果たさなくなることなど、否定評価の要因をそれぞれ挙げている。

（2）活動の対象年齢について

風船太鼓の活動にふさわしい対象年齢について、「作る」「触れる・鳴らす」「使う」の3つの体験ごとに検討させた結果、実践前と実践後で図2の結果を得ることができた。

「作る」体験は、実践前は3・4・5歳から可能との判断がなされており、中でも5歳からが最も多いため、実践後は同様の年齢域の中でも特に3歳からへの比率が高くなっている。風船太鼓の制作は前稿（2017）でも述べたように、鼓面に風船を張る作業が小さな子どもには難しかったものの、学生が子どもへの言葉かけや介入方法を工夫しながら作業が円滑に進むように援助を行ったことから、大人の援助を前提として3歳児からでも体験可能との判断がなされているものと思われる。

「触れる・鳴らす」体験は、実践前は0歳を含め1・2・3・4歳児から可能との判断であったが、実践後は0・1・2・3歳から可能との判断がなされ年齢域が1歳ずつ下がっている。表1の評価項目「鳴らしやすさ」における「少し傾けるだけで音が鳴るので小さい子どもでも簡単に鳴らせる」「床にコンコンと打ち付けている子どももいた」など、小さな子どもでも可能な触れ方や鳴らし方があることへの気づきから、対象年齢域が実践後に引き下げられたものと思われる。

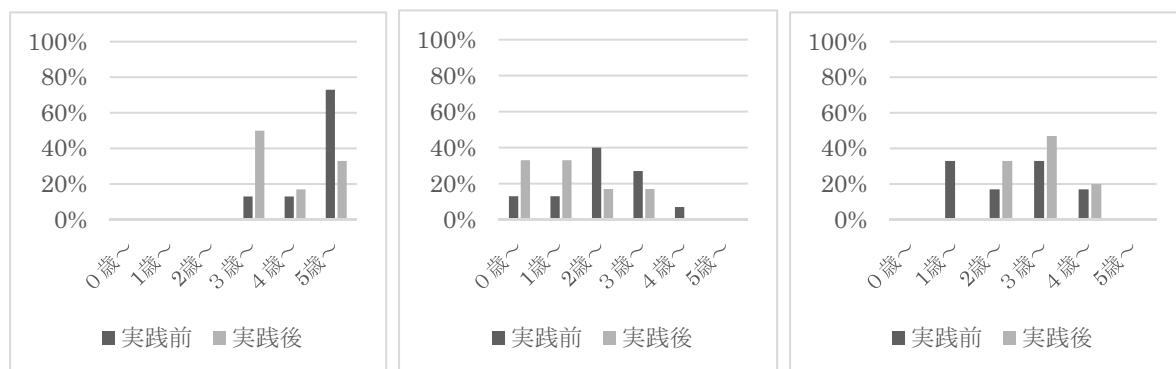


図2 風船太鼓の体験（左図から順に「作る」「触れる・鳴らす」「使う」）の対象年齢設定の割合
(実践前 n=15 実践後 n=6)

「使う」体験においては、実践前は1・2・3・4歳から可能との判断であったが、実践後は2・3・4歳から可能との判断で年齢域が1歳引き上げられている。表1の評価項目「遊び道具としての発展性」では実践場面での子どもたちの姿を受けて、実践後の肯定評価要因がより具体的に記述されていたが、風船太鼓は缶自体も重さがあるので操作するには1歳でも難しく、ある程度の発達が必要との判断がなされたものと思われる。

3. 保育・教育実践におけるプラカップの特徴と活動の対象年齢の分析結果の考察

(1) 特徴について

前章と同様に、図3は保育・教育実践におけるプラカップ太鼓の特徴についての実践前と実践後の分析結果であり、表2は実践前と実践後の評価要因を示している。実践前後で肯定的な評価をそのまま維持しているのは、「1.素材を活かせているか」「2.作りやすさ（技術面）」「4.外見（視覚）」「6.持ちやすさ」「10.衛生面」「11.耐久性」の6項目であり、実践後に評価ランクを肯定方向に上げているのは「5.手触り（触覚）」「7.鳴らしやすさ」「8.音の質」の3項目であった。このうち「7.鳴らしやすさ」「8.音の質」は表2の評価要因に示すように、実践場面で子どもたちがプラカップ太鼓を裏面のみならず側面や中側も自由にたたいて音を楽しんでいた姿を受け、評価が肯定方向に上がったものと思われる。一方、肯定評価の範囲内ではあるが実践後にその評価ランクを下げているのは「3.作りやすさ（構造面）」「9.安全性」の2項目である。「3.作りやすさ（構造面）」は、実践場面でカップの凹凸面にテープを貼る作業が子どもにとっては予想外に難しく援助が必要だったこと、「9.安全性」は、実践前から予測していたマレットの先端部分の危険性が実践場面でも改めて認識されたことから評価ランクを下げている。「12.遊び道具としての発展性」は、肯定評価の範囲内で評価ランクを上げている学生と下げている学生に分かれる。風船太鼓と同様に、実践場面において子どもがカップに棒や指を入れたり、転がしたり、落としたりしている姿が見られたことから、実践後は評価要因も具体的に記述され、遊び道具としての発展性を見出していることがわかる。子どもとモノとの関わり方は多様にあり、その一つに音を鳴らす道具としての関わり方がある。今回の材料であるプラスティックカップも遊び道具として見るとすると、保育での実践の糸口や展開の仕方の可能性を広げることができるものだろう。

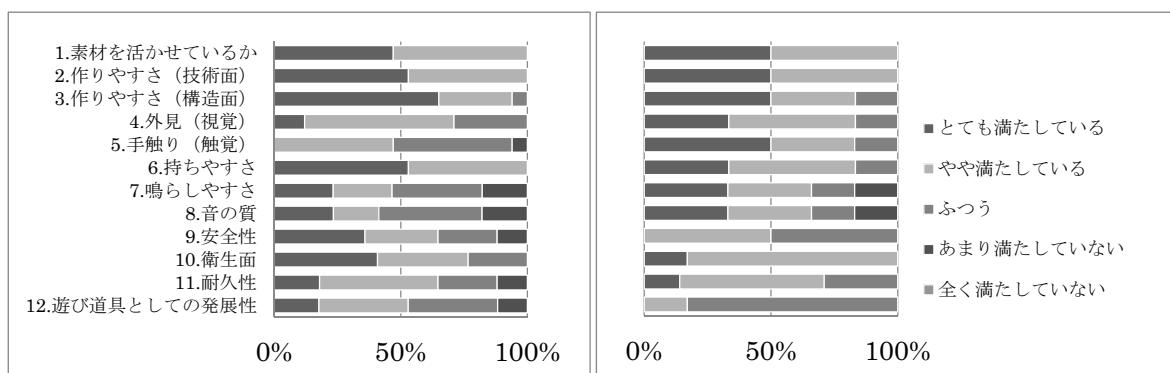


図3 プラカップ太鼓の特徴分析（左図は実践前 n=17 右図は実践後 n=6）

表2 プラカップ太鼓の実践前〇と実践後●の評価要因

(紙面の都合上、実践後の記述内容は実践前に見られなかったもののみ掲載)

体験	評価項目	肯定評価要因	否定評価要因
作る	1. 素材を活かしているか	○カップそのままの形を活かし、底を使う ○形や大きさが子どもの手にフィットする ○ジョアなどのカップでもよい ●プラスティックの素材をうまく活かしている ●穴をあけることなく全てを使えた ●カップの空洞を利用して音を変化させる	
	2. 作りやすさ（技術面）	○容器にテープを巻くのは簡単	○マレットづくりは綿付けが難しい ○テープをまっすぐに貼るのは難しい
	3. 作りやすさ（構造面）	○子どもでもわかりやすい ●定型の形でできていって作りやすい ●短時間で作れる	●凹凸があるのできれいに貼りづらい
触れる・鳴らす	4. 外見（視覚）	○テープを貼ることでアレンジできる ○いろいろな色、模様のテープを使い個性が出る	●個人差が出やすい
	5. 手触り（触覚）	○テープを巻いてあるので痛くない ○マスキングテープのさらさら感 ●右手にバチ、左手にカップを持つのが面白い	○硬い、プラスティック ○テープが少しめくれてくる ●粘着部分が表に来てしまうと少しベタベタする
	6. 持ちやすさ	○小さくて持ちやすい。片手で握れるサイズと形 ○持ち運びが便利 ●凹凸があり持ちやすい	●手が小さい子どもは片手でカップを持てない ●子どもの手の大きさによる
	7. 鳴らしやすさ	○マレットで叩くだけでは音が鳴る ○マレットによって音の響きが変わる ●音階は難しいが叩くだけなら簡単 ●どこを叩いても音が鳴る ●叩く強さで音が変わる	○音程を作るのは難しい。ドの音はしっかりと指でふさぐ ○当たり所によっては鳴りにくかったりする ●のが小さく、小さな子どもには少し難しい
	8. 音の質	○手の広がり（穴のふさぎ方）で音の高低が変わる ○マレットだけでリズムをとれそう ○音だけを鳴らすのではなく、一つの曲として演奏したり、アンサンブルしたりできる ○息を吹いて音を鳴らすこともできそう	○強く叩かないで大きな音は出ない ○やわらかい音ではない ○マレットによっては音が鳴らない ●穴のふさぎ方が難しい
	9. 安全性	○容器は角がないから安全 ○口に入らず良い ○割り箸のとげもテープでカバーできる	○マレットで目を突かないようにする ○マレットの先が抜けないようしっかりと接着する ○容器は呑み込めないが口に入る大きさ ●マレットを振り回さないようにする
	10. 衛生面	○前日に洗って乾かしておけばおわない	○小さな子は噛んでしまうかもしれない
使う	11. 耐久性	○ヤクルトの容器は意外にしっかりしている ○マスキングテープがとれていないか定期的にチェックする	○あまり強く握るとへこむ、つぶれる ○ひびが入ると危ない ○マレットのウッドビーズが棒から取れやすい
	12. 遊び道具としての発展性	○使わないときは棚に飾ると部屋の印象が変わる ●カップに棒や指を入れて遊ぶ ●転がしたり、落としたりして遊ぶ ●叩いたり落としたり様々な使い方ができる	

(2) 活動の対象年齢について

プラカップ太鼓の活動にふさわしい対象年齢について、「作る」「触れる・鳴らす」「使う」の3つの体験ごとに検討させた結果、実践前と実践後で図4の結果を得ることができた。

「作る」体験は、実践前は2・3・4・5歳から可能との判断であり、中でも4歳からが最も多いが、実践後は2・3・4歳から可能との判断で、5歳を待たずとも体験可能であるとの見方がなされている。実践前に指摘されていたマレットづくりの難しさを学生が事前に制作することで回避できたことや、表2の評価要因「作りやすさ（構造面）」に示すように「凹凸部分があるのできれいに貼りづらい」ものの、「（カップ自体が）定型の形でできていってつくりやすい」「短時間で作れる」ことなどから判断がなされたものと思われる。また前稿（2017）でも述べたように、テープを切る場面では、まだはさみを使うことができない子どもたちに対して意欲づけ、作業の簡易化、補助などをを行い、子どもの意欲や達成感を削がないような介入方法を工夫していた。そうした援助によっても体験可能な年齢を、2歳からを含め

て維持できているものと思われる。

「触れる・鳴らす」体験は、実践前は0・1・2・3・4歳から可能との判断であり、中でも2歳からが最も多いが、実践後は0・1・2・4歳から可能との判断で、1歳からへの比重も大きくなっている。音程操作の難しさを懸念し、単なるリズム楽器として扱ったことで、表2の評価要因「鳴らしやすさ」における「どこを叩いても音が鳴る」という点が低年齢の子どもにも活かされたからであろう。

「使う」体験も同様に、実践前は0・1・2・3・4・5歳から可能との判断で分散しているものの2・3歳からへの比重が大きいが、実践後は1・2・4歳から可能との判断で、特に2歳からへの比重が大きくなっている。先述の通り、「遊び道具としての発展性」にも記述されているように、楽器としてではない、モノとの関わりという点においては小さな子どもでも様々な触れ方ができるのであり、そのような意味で対象年齢域を下げているものと思われる。

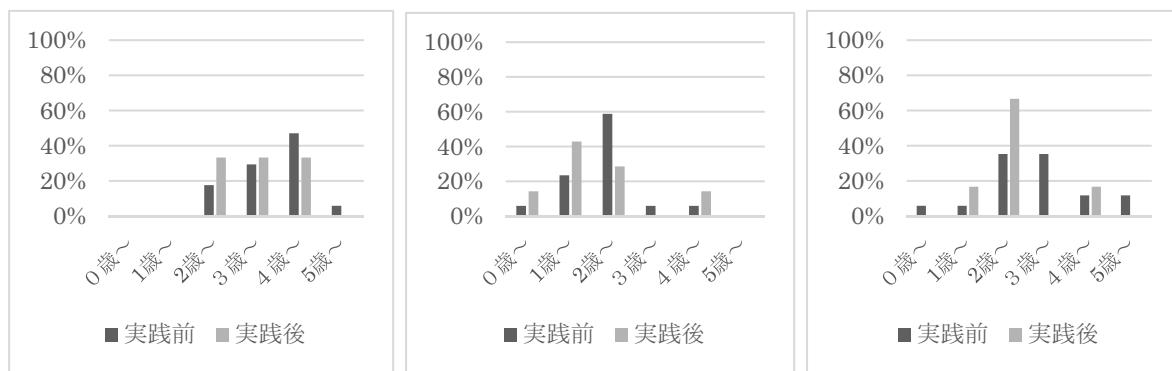


図4 プラ太鼓の体験（左図から順に「作る」「触れる・鳴らす」「使う」）の対象年齢設定の割合
(実践前 n=17 実践後 n=6)

4. 保育・教育実践におけるウォータースティックの特徴と活動の対象年齢の分析結果の考察

（1）特徴について

前章と同様に、図5は保育・教育実践におけるウォータースティックの特徴についての実践前と実践後の分析結果であり、表3は実践前と実践後の評価要因を示している。実践前後で肯定的な評価をそのまま維持しているのは「1.素材を活かせているか」「4.外見（視覚）」「6.持ちやすさ」「7.鳴らしやすさ」の4項目であり、肯定評価の範囲内ではあるが実践後にその評価ランクを下げているのは「5.手触り（触覚）」「9.安全性」の2項目であった。このうち「4.外見（視覚）」について、授業では手触りのよい円筒形の布に缶を包み上部を糸で縫う方法で装飾を行ったが、縫製作業は子どもには難しいとの見解から、実践では不織布を巻いて両端をカラーゴムで止める方法で行なった。この作業を子どもたちも楽しそうに行う姿が見られ、評価要因にも「キャンディのようで楽しげだった」と記されている。また「6.持ちやすさ」「7.鳴らしやすさ」については、缶の直径によっては両手で抱えないと子どもの手に納まらないものもあったが、上下の向きを変えるだけで音が鳴るので、完成後は耳元に缶を近づけ何度も音を確認する姿が見られたことから、その意義を改めて見出している。一方、否定評価の範囲に及んで実

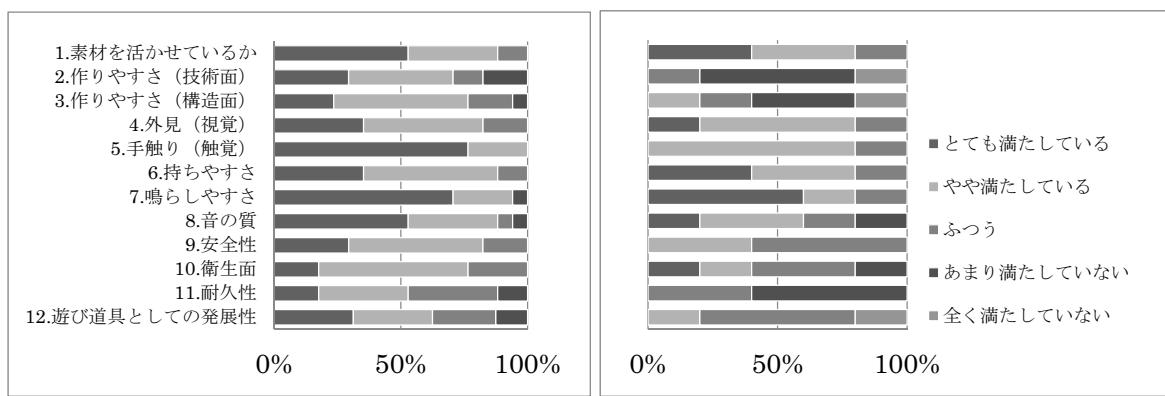


図5 ウォータースティックの特徴分析（左図は実践前 n=17 右図は実践後 n=4）

表3 ウォータースティックの実践前○と実践後●の評価要因

(紙面の都合上、実践後の記述内容は実践前に見られなかったもののみ掲載)

体験	評価項目	肯定評価要因	否定評価要因
作る	1.素材を活かせているか	○リサイクル缶を使っている ○缶の特性（水を保管、飲み口）を活かしている ○水の流れる音が缶の中で響いている	
	2.作りやすさ（技術面）	○缶を引っ付けるのは簡単 ○裁縫せずに輪ゴムで留める方法もある	○接着剤で付ける部分が子どもにとっては難しい ○装飾部分を縫うのは難しい ●作業代行の際、接着剤が手について難しかった ●飲み口に水を注ぐのが難しかった
	3.作りやすさ（構造面）	○缶を上下にして合わせるだけ。わかりやすい	○空き缶同士を飲み口を揃え合わせるのは難しい
触れる・鳴らす	4.外見（視覚）	○装飾材料の靴下がパステルカラーで優しい ○マスキングテープや布で缶を覆うのでかわいい ○だれが作っても同じようになる ●不織布を巻くときキャンディを巻くような動作で楽しげだった ●不織布による飾り付けがかわいくオリジナル	●一見何かわからない
	5.手触り（触覚）	○もこもこ感・やわらかい	
	6.持ちやすさ	○小さな子でも持ちやすいサイズの缶を選ぶ ○細長いと持ちやすい ○両手で持たせる	○小さい子には少し持ちにくい ○年齢による
	7.鳴らしやすさ	○上下の向きを変えるのはそんなに難しくない ○鳴らすタイミングは意識する必要がある	●小さい子にはちょっと難しそうだった
	8.音の質	○水の量や空き缶の容量によって音が変化する ○音が長い、優しい、自然な音、癒される ○胎内のような安心する音 ○日常ではあまり耳にしない音 ○水が下に落ちる音が心地よい ○一定の音が流れる	●少し音量が足りなかった
	9.安全性	○缶を靴下で覆ってあるので安全	○重いので落とさないように注意 ●接着剤の扱いに注意
	10.衛生面	○缶をしっかり洗っておく ○装飾の靴下は汚れたら洗える	●靴下がもこもこしていて汚れが付きやすい ●缶をきれいに洗わないといが残る
	11.耐久性	○むやみに引っ張らなければ破損しない ○傾けて音を聞く分には壊れにくい ○靴下をきちんと縫う	○水の漏れが心配 ○接着面が緩んで缶がずれないようにする ○スチール缶よりアルミ缶の方がへこみやすい ○縫い口の糸がほつれる ●接着剤が劣化してくるとそこから水が漏れる
使う	12.遊び道具としての発展性	○傾けるスピードを変化させる ○缶の長さを変えて音を変える ○空き缶3つ以上つなげて作れないか ○中身を変えたら音が変わる ○転がして遊ぶ ●振る	

践後にその評価ランクを下げたもの、あるいは否定評価のままであるのは「2.作りやすさ（技術面）」「3.作りやすさ（構造面）」「8.音の質」「10.衛生面」「11.耐久性」「12.遊び道具としての発展性」の6項目と、他の2楽器に比べて断然多い結果となった。前稿（2017）にも述べた通り、ウォータースティックは工程に大人の援助が必要な箇所がいくつかあった。特に楽器の本体は水が漏れないように確実に作らなければならず、前半の「缶に水を入れる」「接着剤で付ける」「ガムテープで固定する」の作業は、学生や大人が子どもに代行して進めていったことから、「2.作りやすさ（技術面）」「3.作りやすさ（構造面）」「11.耐久性」に改めて否定評価がなされている。「8.音の質」については一部の学生ではあるが、音量の小ささに関して今回の活動環境では聴き取るのに難しかったとの指摘が見られている。

（2）活動の対象年齢について

ウォータースティックの活動にふさわしい対象年齢について、「作る」「触れる・鳴らす」「使う」の3つの体験ごとに検討させた結果、実践前と実践後で図6の結果を得ることができた。

「作る」体験は、実践前は2・3・4・5歳から可能との判断であり、中でも5歳からが最も多いため、実践後は担当した学生全員が5歳から可能だと判断を行っている。ウォータースティックの制作工程のうち、前半の「缶に水を入れる」「接着剤で付ける」「ガムテープで固定する」の作業は、学生や大人が作業を代行するほかない難しさがあったことから、実践経験を踏まえて見直したものと思われる。

「触れる・鳴らす」体験は、実践前は0・1・2・3歳から可能との判断がなされているが、実践後は1・2・3・4歳から可能との判断で1歳ずつ年齢域が上がっている。表3の評価項目「持ちやすさ」における「小さな子には少し持ちにくい」「小さな子でも持ちやすいサイズの缶を選ぶ」について、実践前から課題となっていたにもかかわらず、缶の収集の際にはその点が配慮されず、実践場面では子どもの手の大きさに見合うサイズの缶を配ることが完全にはできなかった。また缶に水が入ればそれなりの重さにもなる。低年齢児には持ちにくい、鳴らしにくい結果を招いているとすればそのあたりにも原因があり、対象年齢域も上がっているものと思われる。

「使う」体験は、実践前は0・1・2・3・4・5歳から可能とのことで全体に分散しているが、実践後は1・2・3・4歳から可能とのことで、2歳を中心に年齢域が上下1歳ずつ狭まっている。表3の評価項目「耐久性」に「傾けて音を聴く分には壊れにくい」とあるように、丁寧に制作し扱うことさえできれ

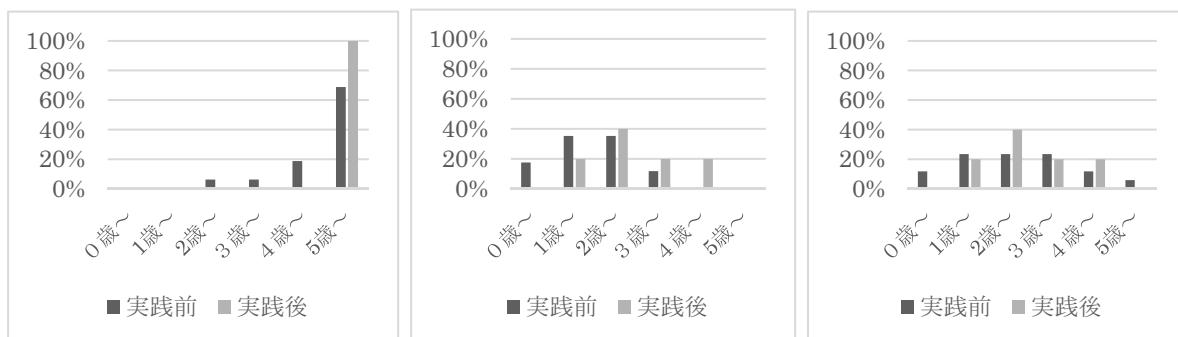


図6 ウォータースティックの体験（左から順に「作る」「触れる・鳴らす」「使う」）の対象年齢設定の割合
(実践前 n=15 実践後 n=6)

ば、この楽器の最大の特徴である音の質「優しい、自然な音、癒される」「胎内のような安心する音」を2歳児からでも心地良く聴いてもらえるとの判断によるものであろう。先述の通り集団での音遊びや演奏活動の際には「音量が足りなかった」という負の面が課題となつたが、日常の中で音に触れるという経験においては、この音量だからこそその良さが活かされるということも踏まえておきたい。

5. 全体を通しての考察

実践前と実施後における学生の楽器の特徴に対する分析結果について総括すると、主な傾向として次の3点が挙げられる。①3つの楽器のうち、肯定評価を維持または肯定評価へ移行する割合が多かったのはプラカップ太鼓であり、否定評価の範囲にも及んで評価ランクを下げる割合が多かったのはウォータースティックであった。プラカップ太鼓は本来有音程楽器であるが、今回はリズム楽器として用いたことにより幼児にも実用的となり、制作面ともに総合的に高評価に至ったと思われる。②3つの楽器を通じ、肯定評価を維持または肯定評価へ移行した項目は「1.素材を活かせているか」「4.外見（視覚）」「7.鳴らしやすさ」であった。廃材を活用しながらも人工の材料を適宜加えながら、子どもたちに興味を持つてもらえるような装飾や、簡単に鳴らせるような仕組みを工夫することで評価へ至ったと思われる。③3つの楽器を通じ、全評価の範囲内で評価ランクを下げる割合が目立った項目は「作りやすさ（技術面・構造面）」であった。その状況として、子どもが制作する上での技術面や構造面の難しさを実践前に予測できていなかった例や、実践前からそれを予測して対策を施していたものの、実践を通して「子どもにとっての作りやすさ」を改めて見直す例も見られた。

また実践前と実践後における学生の楽器の活動対象年齢の分析結果について総括すると、主な傾向として次の3点が挙げられる。①「作る」体験においては、子どもが作業しやすいような工程の設定や援助工夫により、実践可能な年齢を引き下げることができるが、安全配慮や技術経験が必要な特定の材料や工程については対象年齢の設定や考慮が必要となるとの理解を得ている。②「触れる・鳴らす」体験においては、子どもが持ちやすい大きさ・形・重さであるかが重要であり、たとえ風船太鼓のように持ちにくい形状でも、傾けたり落としたりするなどの「鳴らしやすさ」が備わっていれば、実践可能な年齢を引き下げができるとの見方を示している。③「使う」体験においては、完成した楽器を用いて子ども自らが遊びへ発展させる可能性に焦点を当てつつ、操作上必要な発達段階や楽器自体の耐久性も見込んで対象年齢を見定めている。

以上のことから実践前と実践後では、楽器の特徴およびその活動対象年齢に対する学生の分析結果とともに、実際の子どもの取り組む姿や発達段階への洞察を踏まえていざれかの変化を遂げていることがわかる。実践後に楽器の特徴に対する評価ランクを下げたり、活動対象年齢域を狭めたりしている楽器や項目に関しては、今後同様の活動を企画する際に重々な検討が必要となるが、学生にとってはこのような分析体験自体に、保育実践に必要な「子どもを見とり理解する力（見とり力）」「見とりに即して手立てを考案する力（援助考案力）」「実践を省察し課題を見出す力（省察力）」（上村 2016）の形成につながる意義があったものと考えたい。

6. まとめと今後の課題—近年の乳幼児の音楽表現研究の動向から—

先述の通り、風船太鼓とプラカップ太鼓の特徴の中で「7.鳴らしやすさ」「12.遊び道具としての発展性」の2項目については、学生はその評価要因を実践後により具体的に記述する傾向が見られた。またこの2種類の楽器の活動対象年齢について、「触れる・鳴らす」の項目においてはその対象年齢域を下げたり、0～2歳の低年齢児に焦点を移行したりする傾向が見られた。その要因として、風船太鼓では制作後に子どもたちが風船をつまんだり、缶を振ったり、転がしたり、床に打ち付けたり、高く積んだりする姿が見られたこと、またプラカップ太鼓でも同様にカップに棒や指を入れたり、転がしたり、落したりする姿が見られたこと、つまり学生が実践前に目標としていた鳴らし方だけでなく、子どもたちが素材そのものに自由に働きかけて音を探求する場面や、楽器のみならず遊びの道具として関わっている場面を観察できたことによるものと考えられる。

このことに関連して近年の乳幼児の音楽表現研究においては、子どもと楽器との出会いと関わりの仕組みを「アフォーダンス」という言葉を用いて次のように説明している。「アメリカの知覚心理学者ギブソンは英語の afford（～ができる、～を与える）という動詞を名詞形にして『アフォーダンス Affordance』という造語をつくり出した。これは端的にいえば、『環境が人や動物に与える〈行為の可能性〉を意味している』（佐々木 2008）。例えば楽器は一般的に奏法が決まっており、そのように演奏するものと思いがちだが、（省略）子どもは『音楽を奏でる』以外の方法で楽器を使っている。楽器がそこに存在しているがゆえに、これらの行為が行われる可能性も生じるのである」（村上 2016）。ペットボトルを例に取ると次のように説明できる。「乳児にとってそれは、振る、叩く、押す、なめる、転がす、投げる等々、膨大な行為の可能性が埋め込まれた、いわば『アフォーダンスの塊』である。（省略）乳児は身体的な探索を通して『音を発生させるアフォーダンス』に出遭い、それを利用する。（省略）このアフォーダンスの視点は、環境・モノ、そして音をめぐって生じる、乳児ひとりひとりにとってのユニークでダイナミックなかかわり方のありのままを読み解く重要な手がかりを提供する」（丸山 2016）。

このような視点で読み解くと、今回の手作り楽器の活動は、その材料である缶やプラスティックカップに直に触れて関わる制作過程の中で、子どもたちが自己の感覚（筋感覚、視覚、聴覚、触覚）を研ぎ澄まし、運動することによって自分に返ってくる感覚の変化を実感できるような「アフォーダンス」の体験を提供していた、と言うことができるのではないだろうか。今回学生が観察したのはまさにそのような場面であり、実践前に目標としていた鳴らし方にこだわらずに、子どもたちによる身体感覚を伴った多面的なモノとの関わり方を知り、受け入れることを子どもたちの姿から学んだと言えよう。

近年の乳幼児の音楽表現研究の動向では、このような楽器との出会いや関わりを通して、子どもたちが養育者を始めとする身近な人々と音を仲立ちとした関係をつくっていくことの重要性を説いている。そしてもう一つ注目しているのが「文化的実践としての楽器」の側面である。村上（2016）は「楽器はこれまで長い歴史をかけて洗練され、音が磨き上げられたモノでもあり、文化をもっている。（省略）子どもが自ら楽器とかかわり、楽器のもつ文化的側面を学んでいく」ために必要な体験として、「演奏を聴く」「（楽器を使って楽しむ身近な他者に）憧れる」「音楽をイメージする／演奏する」「プロの演奏の凄さに驚く、演奏を聴く」の4点を挙げている。中でも「プロの演奏の凄さに驚く、演奏を聴く」

体験については、修練された技術をもとに素晴らしい演奏を聴かせる大人たちの姿に憧れ、その音楽文化の実践共同体に参加してみたい、学んでみたいという意識を子どもたちに芽生えさせるきっかけとなる。

今回の手作り楽器の活動では、制作後に楽器ごとに「音遊び」と「子どもの歌に合わせた合奏」を学生がリードし、子どもたちがそれに応じる一斉活動を行い、最後に子どもたちのそれぞれ好きな楽器で、歌に合わせて自由に演奏する活動を行った。この活動進行についての学生の事後評価は全体では肯定的評価 11 名（61%）否定的評価が 7 名（39%）であり、今後の課題として、活動の楽しさを増させたり子どもたちの意欲を引き出したりするための演奏方法の伝達や発展の仕方の工夫が浮き彫りとなった（山本 2017）。この課題を「文化的実践としての楽器」の側面に照らし合わせて考えるならば、楽器を奏でる大人たちの姿や音楽そのものに大きな憧れを抱けるような演奏の専門家（プロの演奏家を始め、楽器経験を積んだ学生も含む）を、手作り楽器の活動の演奏場面に起用することも、子どもとの楽器とのかかわりを有機的な学びに編み直す方法の一つとして有用であるかもしれない。平成 28 年度および 29 年度の授業実践においては、学生の振り返りに見られた反省や課題と以上のような専門的見地を踏まえ、子どもの経験と学生の学び双方にさらなる質的向上をもたらせるように取り組んでいきたい。

[参考文献]

- ・上村晶（2016）「保育現場が求める保育実践力の形成段階—保育者への移行プロセスに期待する保育の専門性とは—」『高田短期大学育児文化研究第 11 号』高田短期大学育児文化研究センター：11-20
- ・村上康子他（2016）『音楽を学ぶということ これから音楽を教える・学ぶ人のために』教育芸術社：45
- ・佐々木正人（2008）『アフォーダンス入門—知性はどこに生まれるか』講談社学術文庫
- ・丸山慎他（2016）『乳幼児の音楽表現 赤ちゃんから始まる音環境の創造』中央法規：54-55
- ・山本敦子（2016）「保育者養成校における手作り楽器の授業実践に関する研究動向からの一考察」『高田短期大学育児文化研究第 11 号』高田短期大学育児文化研究センター：53-64
- ・山本敦子（2017）「児童館での手作り楽器制作と演奏活動の企画と実践における保育者養成課程学生の学び（1）—学生の実践の振り返りをもとに—」『高田短期大学紀要第 35 号』高田短期大学：59-71